

子どもの生活課題と向き合う実践づくり

片本 宏茂（市内ブロック）

1. 2010年度

1年目のテーマは「語ろう！子どもたちのこと・授業のことー子どもが輝く体育・健康教育の授業を創造しよう！ー」とした。これは、前年度までのテーマを引き継いだもので、「実践報告、実践分析から自分の実践づくりにつなげる」活動を行った。

同志会は、ドル平に見られるように、「できない子の事実」から技術指導の系統やグループ学習の内容・方法を探ってきた。であるなら、子どもの現実は今と変わっているわけであるから、今の子どもたちの実態（生活課題）を探ることによって、これまでの技術指導やグループ学習のありかた、教科内容も変わってくるのではないかと。そういったものを探ってみようということがこの年の研究のねらいであった。

研究の具体的なテーマは「子どもの生活課題と向き合う実践記録を書く、読み解く。」とした。実践を書くこと・読み解くことを中心に進めていった。実践づくりが中心になるので、基本的な内容として、「実践記録とは、どのように書くのか」「実践記録を、どのように読むのか」の2つを提示して、「実践を読み解く中で、今の子どもの実態、系統性、教科内容、グループ学習などについての成果と課題を探っていく」ことを方針として取り組んだ

実践分析について

具体的には○その実践の特徴は何か。（実践者の思い、願い）○技術または技術指導の系統を整理する（例えば、表に整理する）。○具体的な子どもの様子（発言、感想文、行動など）の変化を読む（したがって、実践報

告には子どもの実際の様子がわかる発言、感想文、行動、動画記録が必要になってくる）

その上で、分析の検討を始める。○技術指導の系統についての検討○指導方法（グループ学習等）の検討○子どものできぐあい、わかりぐあいの検討○実践のねらいに対する考察の検討。以上を柱に討議を組み立てていくのである。

このように実践を読む（分析する）ことをすることから、「実践の書き方」を考えると、①子どもの実態（どんな子どもたちか・実践に取り上げている課題を抱える子・その子が抱えている課題・その集団が抱えている課題＝「生活課題」・②なぜその教材を取り上げたか③何を教えたいか 教える中身（実践終了時に「わかっていること」「できていること」「育っていること」・個人として。

「この子にこんな力をつけたい」・学級集団として。「集団として前進したい」④実践のねらい（実践を通して明らかにしたかったこと・実践者の意図・願い）⑤技術指導の系統性（できるようになるために、どのような技術の系統で教えたか）⑥学習の方法（どのようなグループ学習か。グループ学習の手立て）⑦実践の結果と分析、そして考察（子ども・集団の変容、「実践のねらい」についての考察）

研究でわかったことなど

この年の研究部例会は各ブロックから報告してもらった。報告された実践は次の4本。①山本実践「できないことに どう であろうのか？」1年生マット運動、②日名実践「1年生での初めてのグループ学習体育」マット運動、③牧野実践「6年生の平均台運動」平

均台運動、④朝輝実践「お話マットから側転へ」2年生マット運動。

各「実践のねらい」を見てみると、山本実践は「①側転までのステップを子どもの動きを見ながら考えること。②1年生の4月～6月でどんなグループ学習ができるのか。」

日名実践は「体育でグループ学習をすればどれだけ力がつくか」 牧野実践は「①平均台運動の教材としての可能性を探る。②採点に対する子どもの興味・関心を探る。」 朝輝実践は「教育目標＝お互いに聞きあい、教えながら、グループ学習の力をつける。技の習得を通して自信をつけさせる。教科目標＝前転や側転などのマット運動の基礎的な技を習得する。マット運動の楽しさに気づき、体育が好きになる。」

山本実践は「子どもたち自身による課題解決」日名実践は「グループ学習における話し合い活動」牧野実践は「教材づくり」朝輝実践は「授業づくりの工夫」を実践づくりの課題にしていた。

当然のことだが、実践者の実践に対するねらいや思いによって報告内容の重点が変わってくる。

4つの実践を討議する中で、やはり、技術の系統の重要さがはっきりした。今回、器械運動の実践だったので、低学年から高学年までの指導の流れがよくわかった。

ブロックやプロジェクトでの研究の交流というこれまでのスケジュール上の課題があり、実践については実践者任せで研究部の意図する課題追求の実践づくりができなかったが、実践を1年に4本採り上げることができ、多様な視点から学ぶことができた。

2. 2011年度

研究部では、「子どもの生活課題と向き合う実践づくり」として、楠橋先生に実践をお願いした。課題を抱える子ども・集団にどのように体育実践をすすめるのか、楠橋先生の取り組みを通して、授業づくりの原則を導きだそうと考えた。

研究のねらいは「課題を抱えた子ども・子ども集団における体育実践をつくり出していく中で、すべての子どもに今求められる授業の原則を探っていく。」とした。

楠橋実践から学ぶこと

(1) 今だからこそ「みんなで(=全員)」を柱にした「実践構想」

一人ひとりが課題を抱え、集団の質が高まらないといった学級集団に、実践者はどういった「希望」を持って取り組むのか。子どもたちをどうしたいのか。という自問は重要である。楠橋先生は「みんなで」ということにこだわって実践を始める。普段から子どもに向かう時、「子どもの言葉に担任が耳を傾け共感する。」「活動の一つ一つの理由や根拠を明らかにし、話を進めていく。」「どのようにすれば、それが達成できたとするのか、という『評価』の観点を明らかにする。」などを「対話の原則」として取り組んでいった。では、体育実践で「希望」を実現するにはどうするか。まず、教材の決め方である。悩んだ末、混成競技を選んだ。理由は2つ。「①基本的な運動である「走、投、跳」なら、コミュニケーションの苦手な子どもが参加しやすいし、初めてする教材なので、興味を引くことができる。②個人競技ではあるが、チームで取り組むことで、子ども同士の関わりを生み出すこともできる。」

そして、実践報告には書かれていないが、ねらいに沿って授業の構想をつぎのように考える。「学習課題『チームの順位を上げるためにはどうすればいいか?』を考え、課題解決していく中で、『①それぞれのメンバーを知る②記録を伸ばすための方法を知り、アドバイスし合う。③メンバーの得意・不得意を知って、チームの総合力を上げることに生かす。→チーム戦略を考える中で、お互いのことを知る。』」

(2) 何を教えるか。

重い課題を抱えた子どもたちに何を教えるか。「問題行動」を引き起こし、一人ひとりが「特別なニーズ」を必要とする集団に立ち

向かう時、心が折れそうになる。そのとき揺るがないものとして、実践者が持っている「教える中身」は何か。もちろん体育実践であるから、その教材の技能や技術認識（技術内容）であることは確かだが、今回の実践ではその他に、採点表の歴史変遷（「文化的内容」）を学ばせることにした。歴史を迫体験することによって、「合意形成」「スポーツにおける対等・平等」を教えようとした。「採点表づくり」の授業場面では子どもたちの意見交流を通して、記録を得点化する意味、友だちの思いなどを学んでいく。教える中身

①できること、わかること→「技術的内容」
②採点表づくり、歴史の迫体験→「文化的内容」
③合意形成、対等・平等→「組織・社会的內容」

（3）方法としてのグループ学習

グループ学習で実践を進める。チームによる混成競技なのだから、グループそのものなのだが、チームを作ったからといって、グループ学習になるわけではない。技術について「わかったこと」が、子どもの中へ広がっていく手だてが必要である。感想文によって友だちの考え、思いを知り、わかったことを教え合い、学び合うことで、「できていく」。そして、さらに「わかって」いく。そのような学びがひろがっていくグループ学習を仕組む必要がある。今回は、悪天候、問題行動の多さ、卒業前の忙しさなどで、そのあたりが不十分になったが、そういった中でも、課題を抱える子に関わる子、逸脱する子たちの参加、子ども同士のアドバイスの質の変化、技術ポイントの理解など、グループ学習を仕組んだからこそ現れてきたものがあつた。

3. 2012年度

授業実践づくりを若い部局員中心に行なつた。この年度の研究は、実践的に言うと

『「つまずいている子」を切り捨てない授業づくり』とした。前年度の研究部テーマ「子どもの生活課題と向き合う実践づくり」の課題を引き継ぎ、「できること・わかることに

つまずき」そして「つながることにつまずいている」子どもたちを切り捨てない実践をつくりだしていこうというものである。前年度は『のってこない子に学ぶ実践研究』に研究の視点を転換することが必要だと述べた。

「のってこない子」のつまずきを明らかにし、乗り越えるにはどのような指導の内容・方法があるのかということを考えていこうとした。

川淵実践から学ぶこと

（1）ときほぐし紡ぎなおしたい（実践者のねがい）

持ち上がりの5年生。低学年の時から「やさしくていい子たち」と言われてきたクラスで、「問題のない」ように見られてきた集団の中にも強い力が支配しているを感じさせる場面があり、やさしいというのとは裏腹に、大人や周りの友だちに求められて、本音とはちがう同調圧力による不安と緊張の中に友人関係があるのではないか。川淵先生はこのように分析し、特に気になる3人に着目しつつ、学習による集団づくりの構想を立てていく。今ある人間関係をもう一度ときほぐし紡ぎなおす作業をさせたいという意志をもって実践をスタートする。

Mは、家庭環境に不安定なところがあるためか、落ち着かず、イライラすることがあると投げやりになる。運動は得意だがアドバイスすることより、自身が楽しんでいる。

Yは、自分の壁にぶつかったときは、拒否してしまう。自分勝手な行動が目立つ。運動は得意ではないこともあり、うまくいかないと激しく拒否をする

Gは、運動能力はずば抜けて高い。リーダータイプだが、人前では「正論」を言い、陰では悪口やからかいをする。逆らえない雰囲気があり、同調圧力という課題に取り組むきっかけになった。

（2）教材の特質から（球技による関係性の学び）

学級の実態から、対等平等な関係でまわりをつなぐことをねらい、フラッグフットボー

ルで取り組むことにした。その理由は①ゲーム形式が攻防入り乱れていないので、教える中身が明確②コーチの役割が大事③役割がはっきりしているので人間関係の認識が育てやすい。起きるトラブルや新たな課題に向かう時、一人一人の生活課題による「観」がぶつかり合う。その時、対等平等にお互いの思いや考えを交えていく場を作り出すことで、集団の高まりを生み出していくことに気付かせようと考えた。

(3) つまずくSに関わる(教え合うことで関係を深める)

運動技能が低いSについて考察している。グループノートや感想文の記述からグループのことや個人を分析する。Sの変化はグループの仲間との教え合いによって動きに現れる。空間を利用すること・空間を作り出すことなどを仲間と一緒に発見していく。2人の攻めでペアが作ってくれた空間を走り抜けることが安定してできるようになってくる。動き方を理解することで自分と仲間との関係認識が深められていった。コーチ役も含めて周りの子たちは、Sへの伝え方や練習方法の工夫に主体的に関わりを深めている。

(4) 居場所になるグループ

「自治的な学習集団」へ高めていくことを実践課題にするとき、うまくなること以外のものに着目する。それが「観」である(「友だち観」「競争観」など)。同調圧力による不安と緊張の中に生きる子どもたち(生活課題)に、どんな観が育ったのだろうか。Mは授業に参加することが増え、フラフトを楽しむ。それが彼の「居場所」になった。教材だけではない。仲間がMを排除せず気遣い寄り添い待ってくれると感じているからなのではと実践者は捉える。Yは作戦づくりに面白さを見つけ前向きになる。最後は「このチームでよかった」と書いたことに実践者は驚くほどだ。Gのグループには運動が極端に苦手な子がいる。その子たちに丁寧に教えている様子が度々見られるようになる。感想文には仲間の変化を見つけて書いてくるようにな

っていった。技術の教え合いが関係性を太らせ、その関係が彼らの「居場所」を生み出していく。人は居場所と感じたとき「本音」を語りだす。そこにある「信頼」を支えに語るのだろう。

(5) 体育でこそ教えられること

生活課題とは、「生きる願い」とも言える。別々に生きてきたもの同士が共に生きる時、お互いの「観」をさぐり合い、ぶつかり合う。体育という教科は「観のぶつかり合い」に出会うことが多い。それを道徳的に解決するのではなく、教科科学としての学びによって解決する。そういうことができるのが体育ではないだろうか。他の教科にはない「体育の独自性」であると思う。

これからの実践づくりの課題

課題としては「つまずいている子どもを中心に、グループ学習が成立するためのポイントを探る」ことを深めていきたい。その方法としては次のようなことを挙げてみた。①子どもの分析から実践課題を引き出す②つまずきの整理=技術・人間関係・学力③「へたな子」と「うまい子」の学び合いの様子④子どもの今ある観にゆさぶりをかける⑤異質協同のグループ学習の成立ポイント⑥学び合いの様子の可視化

具体的な実践づくりの進め方としては、「着目した子ども、グループの変容を記録する。どのような指導で変容したのか。その変容は子どもの何を引き出したのか」を分析していく。その分析結果からグループ学習成立の大切なことを明らかにする。(子どもの生活の必要に応える学び、学びのリアリティー)」といった実践づくりも考えられるのではないかと思う。

この3年間、子どもの生活課題と授業実践づくりについて考えてきたが、生活課題の定義について研究部で明確に整理できず、実践づくりの方向がぶれてしまったことが大いに反省すべき点である。